

## 「小児摂食嚥下障害」 ―食べるための運動機能―

かつて胎児は昏睡状態にあると考えられていましたが、羊水中で活発に動き、刺激に反応しています。胎児は生まれた後の胎外生活に必要な能力を獲得しているのです。

お母さんのお腹の中にいるときから、生まれてからのために食べる練習をしています。羊水を飲み込む動きは17週頃より見られ、吸啜反射は22週頃から明らかになってきます。食べる機能を獲得するために、様々な練習をしているのです。

### 【吸啜運動とその発達】

#### 原始反射 primary reflex

新生児固有の反射を原始反射といいます。以前は、原始反射は脊髄や脳幹の反射であり、発達とともに高度の中枢により抑制されて消失してしまうものと考えられていました。近年、原始反射は、ある特殊な刺激により引き起こされる自発運動の一部であり、完全に消失することはない反射であることがわかってきました。ここでは、食べるための反射についてお話しをしていきます。

#### ① 探索反射 infantile reflex

口唇あるいは口角その他の口唇周辺部の顔面皮膚の刺激に対して、頭部を刺激源の方向に向けて、同時に開口し舌を突出させて刺激源を口腔内に取り込もうとする反応です。

#### ② 口唇反射 lip reflex

口唇に触刺激を加えると、上下の口唇をすぼめて前方に突出させ、刺激源を口唇で挟み込むようにして閉口する反応

#### ③ 吸啜反射 suckling reflex

胎児の吸啜様運動は胎生20週頃より見られます。新生児では、口唇反射により口腔内に取り込まれた乳首を、下顎を挙上させ上顎中央部の吸啜窩と呼ばれる部位に押し付けながら、舌で乳首を包み込むように母乳を絞り出し、口腔内を陰圧にすることで母乳を流出させています。

#### ④ 嚥下反射 swallowing reflex

唾液や食物が口腔後方に送り込まれ嚥下反射誘発域に達すると嚥下運動が起こります。

#### ⑤ 咬反射 bite reflex

指などで歯肉を刺激すると、下顎を開閉させて噛もうとする反応をします。リズムカルな顎運動が誘発される場合と、持続的な力で噛む場合があります。健常児では生後3～5カ月で消失していきます。この反応が後の咀嚼運動と関連性があるのかは明らかになっていません。

